慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』出典攷

――類聚名義抄からの引用を中心として――

山本真吾

目次

はじめに
一、慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』について
二、出典の検討
三、『略注』に引用された類聚名義抄
むすび

はじめに

類聚名義抄に関する研究は、長年に亘って数多くの成果が積重ねられて来た。日本語史研究の一領域たる辞書史の上で、これを軸とした従来の研究のあり方は、極く大雑把には次のように分類することが可能のように思われる。

一、成立に関する研究――類聚名義抄がどのようにして成立したか。ここには、(1)成立時期・編纂者、又編纂の意図・目的について考究することはもとより、(2)系統研究。諸本を種々の観点より比較することによって原撰本たる図書寮本から改編本系諸本への発達経路を解明しようとする研究[2]、そして(3)出典研究。前代の辞書の影響を如何ように受けたかという古辞書間の問題[3]と広く前代の古文献の字句、音訓を如何に摂取したかを具体的に考えようとするものがあって[4]、

このように凡そ(1)〜(3)の三つの柱を認めることができよう。

二、影響に関する研究――類聚名義抄が後の文献にどのような影響を与えたか。これも、(1)後代の辞書への影響を論ずる古辞書間の問題と、[5](2)これがどのように流伝・利用されたかを辞書以外の他文献に引用された逸文などの蒐集・検討によって考えようとする研究[6]がある。

右の分類に基くそれぞれの研究課題は、勿論互いに密接に関連するものであるし、[7]又、これはひとり類聚名義抄にとどまるものではなく、他の古辞書の研究についても概ねあてはまるものと思われるが、就中、類聚名義抄に関しては、各項の研究がそれぞれに精密の度を加え、大幅な進展を遂げているのである。[8]

本稿も、かかる先学の驥尾に附して、右の二・(2)の課題について、『遍照発揮性霊集』の注釈活動に類聚名義抄が利用された一事例を報告しようとするものである。具体的には、標題に掲げた慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』に改編本系類聚名義抄からの引用がなされていることを指摘し、若干の考察を加えようと思う。

一、慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』について

弘法大師空海の詩文を高弟真済（八〇〇―八六〇、高雄僧正とも）が編集した『性霊集』（詳名『遍照発揮性霊集』）の注釈活動は、平安時代末期より今日に至る迄行われていて、中世迄（室町時代迄）に限っても、次の如く多くの注釈書の存在が知られている。[9]

①顕鏡鈔　三巻　写本　京都東寺所蔵　仁和寺済暹注。

②性霊集略注　十巻二帖　写本　慶応義塾図書館蔵　嘉元四年写。

③性霊集緘石鈔　六巻本・十巻本の二部　写本　種智院大学所蔵　杲宝注。

④性霊集抄註　九巻（巻三欠）　写本　名古屋真福寺所蔵　永和三年写。

⑤性霊集聞書　二冊（巻五・八のみ）　写本　高野山金剛三昧院所蔵　室町期写。
⑥性霊集巻十注　一巻　写本　慶応義塾図書館蔵（弘文荘旧蔵本）。
⑦性霊集聞書　十冊　写本　高野山金剛三昧院所蔵　正平十六年伝受、永正十年写。
⑧性霊集聞書　十七冊　写本　高野山持明院・同宝寿院・同真別所所蔵　室町期写。
⑨性霊集記注鈔等　七冊　写本　宝亀院（宝寿院）所蔵　室町期写。
⑩性霊集註　六冊（巻五・六・七・八・九・十のみ）　写本　高野山三宝院所蔵　室町期写。
⑪性霊集文筆私鈔　五冊（巻四・五・七・八・九のみ）　写本　宝亀院所蔵　室町期写。
⑫恫（ママ）（「性霊」の略）　一冊（巻一「喜雨歌」迄）　写本　金剛三昧院所蔵　室町期写。
⑬性霊集私注　一冊　写本　宝寿院所蔵　室町中期写。
⑭性霊集註　七冊　写本　宝寿院所蔵　室町期写。
⑮性霊集記　一冊　写本　三宝院所蔵　室町期写。

これらの書による、中世に於ける『性霊集』の注釈に関する研究は、未だその多くが手つかずの状態であって、日本語史のみならず中世文学の方面からも今後その進展が大いに期待せられるものである。

この中にあって、此に述べる②慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』は、夙に阿部隆一氏が現存中最も古いものに属する一本として注目していられる[10]（現存最古本たる①『顕鏡鈔』は、岩波日本古典文学大系71・解説に書名を挙げ済暹編の旨紹介あるのみ、未見）。

この慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』（以下『略注』と略す）は、性霊集本文の中から字句を摘録し、それに主として内・外典からその出典を引載して注を下し、その引用は原文をあげることかなり詳しく極めて要を得た注である。後に性霊集注釈を大成した運敞の『遍照発揮性霊集便蒙』にも数多くの内、外典が引かれているが、これらは『略注』に出典名

を示して引載されてあるものと一致する例が多くこれを踏襲していると見られるふしがある。(11)

『略注』の書誌については、既に阿部氏の報告がある（『慶応義塾図書館蔵和漢書善本解題』19〈昭30〉、以下『解題』と略す。「新に見出されたる鎌倉鈔本真弁撰『性霊集略注』」〈『慶応義塾図書館月報』9、昭30・8〉。此の度、本稿の筆者も原本を実見する機に恵まれ、(12) 新に気付いた点もいくつか存するのでこの点を中心に以下に記すこととする。

本書の装幀・料紙・法量については『解題』に記す如くであって、横本二帖、厚手の楮紙に書かれている。

○鸞旛者鳳ノ一ノ名鳳ハ火精也（大イ）（上二七オ11）

は、性霊集本文（11沙門勝道歴山水瑩玄珠碑）の詩句「嶺岑不梯　鸞旛無図」の「鸞旛」に対する注であるが、注文の「火」字右傍に「大イ」とあり、これより異本の存したことが知られる。又、本文は比較的丁寧に記されているが、誤写や表記様式（割注や一字下げなど）の不統一がまま認められる。奥書は左の如くである。

〔上〕嘉元四年丙午九月十日於高野山

金剛三昧院書寫畢　佛子空悟（七五オ、「性霊集略注」の尾題後）

〔下〕貞応二年癸未九月十日酉尅傳受之了

真弁

此私注者以聖範覚蓮房阿闍梨

御口傳大底注之雖訓尺慥説

領解定有謬欤但志之所之為

奉報高祖大師鴻恩也

嘉元四年丙午九月廿六日於高野山

金剛三昧院西寮書寫了　空悟（六四ウ）

又、上巻の後表紙裏綴目近くに

○此書両巻永和元年之
春之比自三昧寿院相傳之
聖源之

とある。右の「永和元年之」の直下と下巻後表紙裏、やはり綴目近く下部に「所（？）之」の三字あるも未詳。この「聖源」は、『解題』では「重源」とするが誤認であろう。(13)

上・下巻の奥書によって知られる如く、本書は、嘉元四年（一三〇六）高野山金剛三昧院に於いて空悟（伝未詳）の手に係って書写された本であり、仮名字体・踊字の起筆位置よりも首肯される所である。

この奥書から『解題』の推定される如く覚蓮房聖範の口伝を真弁が貞応二年（一二二三）に伝受したことが判明する。(14)

この「真弁」なる僧は、『高野春秋編年輯録』（大日本仏教全書一三一）に次のように見える。

○（寛喜三年）冬十月十四日。於二大阿闍梨信検校住坊一。授二傳具支灌頂於真辨琳光房一。（割注右）色衆（割注左）十四口。

○（正元元年）秋七月廿六日。良覚師入二寂于花王院一。（割注右）翌（割注左）日真辨替補焉。

○亀山院文応元庚申年春王正月朔日。第五十六世執行検校法橋上人位真辨朝拝。（割注右）字十輪院琳光房唱レ之。是則州（割注左）之名手也。成佛房入壇資。

○（文応元年）三月六日癸酉（割注右）井宿（割注左）土一検校真辨授二与両部灌頂于賢實厳浄房一。（割注右）道場直真言堂内（割注左）色衆十二口。

○弘長元辛酉年春正月朔。執行検校執行（割注右）（考）一本無（割注左）執行二字真辨朝拝。

○同月日（弘長元年七月廿二日）。被レ止二真辨之當職一。是依下為二大衆一見ち逐二出山家一也。（中略）。○（割注右）真辨逐出之首尾不二分明一。古

(割注左)牒失レ之蓋異母弟一味歟。

○(弘長二年正月)晦日。改二易成詣一而還二補真辨一。是宗家座主定親僧正(割注略)依レ見レ差二登令旨一也。(割注右)未レ考二其(割注左)来由一。

○(弘長二年)二月朔。第五十八世執行検校法橋位真辨還補拝堂(割注右)自二寺中一令レ(割注左)還二補之一了。執行代頼辨(割注右)恵眼房。(割注左)東南院。

○(弘長二年)六月十日。真辨又為二大衆一被二追却一訖。(割注右)古牒幷山史等。不レ(割注左)出二其所由一也。祐遍替二補職一焉。(割注略)

○(弘長二年六月)十五日。第五十九執行検行法橋上人位祐遍拝堂。(割注略)古牒云。此拝堂之時。不レ開二御影堂内陳之扉一。是所謂衆中再逐二真辨一之騒動。故辨之徒相挙而不レ肯レ渡二堂社之鑰一也。

又、『野峯名徳伝』巻下(大日本仏教全書一〇六)には、

○真辨。州之名手人也。才悟行峻。風韻遠矣。住二十輪院一。山中八傑之一也。編述之書。学者往々照焉。世不レ傳可レ惜哉。正元元年。補二検校一。弘長元年八月滅。

とあることなどから、真弁は、高野山八傑の一で字は琳光と言い、十輪院に住した(『略注』の上巻外題右「内題性霊集略注(割注右)十輪院真辨(割注左)作二之内」〈朱書〉とあるに適う)。生没未詳乍ら、正元元年(一二五九)第五十六代高野山検校に補し、一時職を停止せられるが、弘長二年(一二六二)第五十八代検校に還補したことが知られる。[15]

又、高山寺古文書第三部六五「神護寺置文案」(嘉禄三年五月)の署名に「大法師真辨」と見えるが、同一人物であるかどうかは未詳とせざるを得ない。[16]

この他、櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』(昭48・山喜房仏書林)にも、

○この覚海の門下に四哲を出し、法性・道範・尚祚・真弁の四人を生んだ事は周知の事実である。中にも法性と道範と

は最も有名な人である。この道範と相並んで覚海に受学した桜池院恵深の門下に三蔵院覚和があり、十輪院真弁には大楽院信日がある。その信日の弟子に信堅・玄海等が続出して、野山の八傑と名づけられる人達も出た。これらの人が古義教学の思想を代表していたのである。（第二編中古の真言密教の成立過程第六章関東に於ける東密の展開㈡古義教学の弘通）

として、古義教学の思想を代表する人物の一と説かれている。

右の十輪院真弁と大楽院信日との関係は、後述の如く、類聚名義抄流伝の上でも大きな意味を持つように思われるのであって、注目に値する。

一方、性霊集に関する口伝を真弁に授けた覚蓮房聖範は、醍醐寺本性霊集に、

○読覚蓮房阿闍梨本。重以證本付異説合朱墨書之。」承安二年五月廿三日。奉仰点進彈。」正大弼従四位下兼行讃岐介藤原朝臣敦周。（巻第一奥書）

○貞応第二歳仲秋下旬候。引合勘注読。覚蓮房阿闍梨訖。或訪西郊学窓。或挙南山禅崛。久送数廻之暦。適終一返之功矣。」末資隆澄。（巻第十奥書）

とあり、この本の所拠原本と推定される内藤本（内藤湖南旧蔵・武田鋭太郎氏所蔵）の巻第十の奥書にも、右とほぼ同じ文を記しており、実際に性霊集を訓じていたことが確認されるのであって、その訓法の特徴については、既に小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』第六章第二節博士家学者の関係せる仏書の訓法（昭42・東京大学出版会）に詳しく論ぜられた所である。すなわち、この覚蓮房聖範は、性霊集本文の訓読と注釈の結果を今日に伝えていることになるのである。

次に、『略注』の内容について若干の考察を行う。

『略注』の上巻は、第一巻（一オ～二二オ）として性霊集本文の序と巻第一の内容を収め、第二巻注（二二ウ～三八オ）

は巻第二、第三巻注（三八ウ～四六ウ）は巻第三、第四巻注（四七オ～六四ウ）は巻第四、巻第五注（六五オ～七五オ）は巻第五の本文の字句について注釈を施している。下巻は続いて第六巻（一オ～一三ウ）――巻第六、第七巻注（一四オ～二六ウ）――巻第七、第八巻私注（二七オ～四四オ）――巻第八、第九巻私注（四四ウ～五四オ3）――巻第九、第十巻私注（五四オ～六四オ3）――巻第十、の如くである。

被注釈の字句は、概ね性霊集所収詩文の本文の順に従うものであって、例えば、序の冒頭部の場合、

遍照発③⑥揮性霊集序

西山禅念沙門真②済撰集

余少小也頗貴①先氏之風。志④学之後。楽寂歴而不屑此事。仰幽人之幽行。耽大道之大妙。爰有一上人。号曰大遍照金剛。青⑦襟⑤⑧摘槐林之春秋。絳⑨帳⑩富山河之英萃。遂則⑪陋域中近智。慕超然遠猷⑫。出俗入真。去偽得貞。⑬夐巌豁溪之美。神木霊草之区。耳目所経。未嘗不究。毎歎曰。⑭提葉彫落久。⑮龍葩待何春。吾生之愚。憑誰帰源。⑯但法有在。⑰起予是天。（以下略）

①～⑰が被注字句で、この順で注釈されてゆく。右の②・③・⑥の如く若干の先後はまま認められる。

又、醍醐寺本（岩波日本古典文学大系本）に拠って、本文と被注字句とを対応させてみると、上巻の末部の「動天感神者」云々（七四ウ11）は、巻第五(43)為橘学生与本国使啓一首の「頗有動天。感神之能矣。」に対応すると考えられるが、これが(44)為藤大使與渤海王子書一首の本文に対する注に後置されており順序が逆になっていることが注意される。又、奥書（七五オ）の後に、「他人之沾哉」云々（七五ウ）とあるのは、序の最後の字句「誰称他人沾哉。」の注に相当する。上巻では、巻第四(22)奉献雑書迹状一首の本文についての注は記されない。

下巻では、醍醐寺本巻第八の(76)為忠延師先妣講理趣経表白文一首、(77)講演仏経報四恩徳表白一首、(78)為先師講釈梵網経表白一首、(79)三嶋大夫為亡息女書写供養法花経講説表白文一首の詩文に相当する注が、(76)→(79)→(77)→(78)の順に配され

ている。これは、『略注』の拠った本文が大系本の底本たる醍醐寺本とは異なる、高野板などの本文に従った為であろうと考えられる。下巻では、巻第六(50)藤大使中納言為亡児設斎願文、巻第八(80)有人為先舅修法事願文、(86)勧進奉造仏塔知識書一首、巻第九(87)宮中真言院正月御修法奏状一首、(100)高野建立壇場結界啓白文一首、巻第十(109)後夜聞佛法僧鳥、の本文に関する注が記されない。[17]

扨、最後にこの項では本書の注釈形式について記すこととする。[18]

『略注』の注釈形式は、「A者B也」を基本型とし、性霊集の漢文本文の字句（＝A）について、注解（＝B）を加えるものである。

被注字句A部については、先述の如く概ね漢文本文の順であるが、

○八狄七戎者九夷八狄七戎六蛮云々（上六六オ7）

などは、性霊集巻第五(38)為大使與福州観察使書一首中の「八狄雲会膝歩高臺。七戎霧合稽顙魏闕。」の対句の対応する字句をまとめて注解を下しており、かような事例も存する。又、

○淵獺者

林鳥者　（上三〇オ7・8）

（巻第二(12)大和州益田池碑銘・序中の「淵獺祭魚林鳥友哺」の字句）

の如く、「A者」とあって注解部Bの存しない例も散見する。

注解部Bについては、「A者」の後、(I)「――ニ（云）」として出典を明示し以下にその文言を引載する、

○志学者論語ニ曰ク子ノ曰吾十有五ニシテ而志于学ニ」（上一オ6）

の如き形式と、(II)直ちに「――也」と注を下す形式とが存する。

○気質者文ノ花實也（上五オ4）

(I)の引載された文言は、中に、

○域中近智者文選天台山賦曰釈(ステ)、域中之常恋(ヨノツ)暢超然之高情(ヲ)云々（上一ウ9）

○鸞鳳考典略云鸞ハ神霊之精也文（上一一ウ6）

の如く、「云々」や「文」で結ばれる形式がある。

(II)の形式では、「――義也」、「――貞也」の表現形式がよく使用され、

○清塵者申大師御威儀義也（上二ウ10）

○靄々者雲之聳貞也（上一三オ8）

の如くである。他に、

○降年者報年云也（上一三オ4）

○入瓶小子者在阿育王経阿奴迦王ノ時ノ沙弥事也（上三三ウ7）

の「――云也」・「――事也」の形式も認められる。そして、この(II)の形式の場合は、

○龍葩者龍花樹之花也弥勒下生経見タリ（上二オ2）

の如く、注の後に出典名を添えることがある。

さらに、(I)の形式と(II)の形式とを合せた、(III)「――也」と注解を下してから、「――ニ曰」として出典より文言を引載する形式も存し、これが最も詳しい注釈の形式となっている。

○三略者上略中略下略也　文選云張長受テ黄石之符ヲ誦三略之説ヲ注云黄石者神人也（上一六ウ2）

本書の注釈の形式は、細かく観察すると、他にもいくつかのヴァリエーションが存するけれども、類型として把握し得る基本的な表現形式は凡そ叙上の如くであると思われる。

但し、右の他に、一字下げで「今案」と書き出して、私見を提示したり、二、三字分空白をおいて、「私入之」と記し

て注を添加する形式の存することは付け加えておきたい。

以上、『略注』の内容に関する略説・補足説明を試みた次第である。

二、出典の検討

前項でも述べたように、『略注』には、先行の諸書よりの文言が極めて多く引載されている。性霊集注釈史に於ける『略注』の性格究明の為にその引用書の検討が不可欠であることは言うまでもないが、加えて、『略注』成立に係る背景、即ち当時の教学の態度をこれによって窺知することも可能となるかも知れないし、又、諸書がいかように流伝し利用されたかを知る上でもこの検討を積み重ねることには意味があると思う。今日それが散佚した書であったり、古写本の伝存しない書物であったりした場合には、尚更重要となろう。『略注』に引用されたそれぞれの典籍について、諸本（含訓点本）を見較べながら対照させてゆくことにより、諸書の引用態度は次第に明らかになることと思われるが、この項では、その一階梯として出典文献の概要を把握しておきたいと思う。

前項に於ける『略注』の注釈形式B(I)・(III)「――曰（云）」によって示された引用書名、加えて、(II)「――也」に添えられた書名の数は夥しいのであるが、これをまず整理しておきたい。この出典として明示された文献を、(A)外典、(B)内典、(C)辞書・音義の類に大別して集計し、各項毎に気付いた点を記すこととする。

(A)外典

聖教以外の、所謂外典について引用回数の多い出典から順に示すと次の通りである（出典名下の数字は引用回数）。

文選（並注）117／論語（並注疏）63／毛詩（並箋注）44／史記（並注）25／礼記（並注、正義）23／周易（「易」とも）15／荘子（並注）14／劉子14／尚書（並注）13／淮南子（並注）9／孝経（並注）8／後漢書8／周礼（並注）8／老子経（並注）8／文集6／李嶠詩（並注）6／顔氏家訓（「顔氏」・「家訓」）5／初学記（並注）5／時務策5／帝王世記5／漢書

4／山海経4／尺霊實年代暦（「釈霊實」とも）4／拾遺記4／晋書4／東観漢記4／白虎通（並注）4／抱朴子4／古文孝経3／世説3／爾雅（並注）3／典言（並注）3／白氏六帖3／孟子3／列子3／漢武故事2／廣雅2／西京雑記2／周書2／春秋2／春秋左氏伝（「左伝」・「左子」）2／春秋伝（未考）2／臣軌2／神仙伝2／天台山賦2／東方朔十州記2／博物志2／免園策天地部2／呂氏春秋2／晏氏春秋1／逸士伝1／運命論（「李蕭遠――」）1／賈誼新書1／家語1／翰苑漢武帝部1／韓詩1／顔師古注1／漢武帝内伝1／関令尹喜内伝1／魏書1／魏徴策1／翹材文苑1／鏡中集1／曲水序（「王元長――」）1／琴操1／孔叢子1／孝子伝1／五運図1／五経通義1／古今篆隷文体1／載記1／三五記1／三国名臣序賛1（「袁彦伯――」）／三斉略記1／三輔黄図1／釈名1／祥記1／蜀志1／事類賦1／人民蒙求1／説苑1／誡子拾遺酒誡篇1／千字文1／楚辞1／琱玉集1／朝野僉載1／鄭世家1／唐令1／風俗通1／南越志1／日本紀1／（李嶠）百詠1／符子1／本草1／楊子法（言）1／励志詩（「張茂光――」）1／廬山記1／列仙伝1／録異伝1

外典について見た場合、九九種にのぼる莫大な数の典拠名が示されている。中でも、文選からの引用が最も多く、次いで、論語・毛詩・史記・礼記と続く。文選の場合、「文選云」として引く以外に、「王元長曲水序」（＝文選第四十六巻・序）・「袁彦伯三国名臣序賛」（＝文選第四十七巻・賛）・「李蕭遠運命論」（＝文選第五十三巻・論）などの如く詩題のみ掲げてその文言を引用する場合があって（右では別に掲げてある）、これらを加えるとさらに他の漢籍を凌駕する。又、論語は注を引くこと多く（内二十例）、中に「孔安国」・「馬融」の名を挙げて引く例も存する。[19] 以上の如く、外典では中国の代表的な古典を引く場合がほとんどであるが、国書として日本書紀の引用が存することは注意しておきたい。

(B)内典（含仏教関係書）

聖教類は次の通りである。

大般涅槃経10／西域記9／智度論（「智論」・「大智論」とも）8／高僧伝7／大日経疏7／法華経7／花厳経5／尺氏要

覧4／弁正論4／経律異相3／仁王経3／潅頂経2／倶舎（論）2／金剛般若経2／最勝王経2／慈恩伝2／尺迦譜2／十一面儀軌2／心地観経2／千手経2／続高僧伝2／秘蔵記2／譬喩経2／理趣尺2／阿育王経1／優塡王経1／盂蘭盆経1／空寂所門経（空寂菩薩所問経）1／花厳十住品1／花厳綱目1／玄賛（法華経玄賛）1／劫章疏1／五教章1／御請来（目録）1／金光明経1／（真言付法）纂要（抄カ）1／（三教）指帰1／慈氏菩薩法1／地蔵儀軌1／修禅要決1／須弥四域経1／十誦律1／十二遊経1／常暁律師録1／貞元録1／浄飯王泥洹経1／浄名経1／新譬喩経1／随願往生経1／増一経1／雑宝蔵経1／大集経1／大荘厳論1／大日経1／大日経尺1／大般若経1／（華厳経）探玄記1／天台補注1／南山尺1／八字経1／彼岸斉法成道経1／悲花経1／百法（論）抄1／寘頭廬突羅闍為優陀延王説法経1／付法伝1／報恩経1／法苑珠林1／方等陀羅尼経1／菩薩本行経1／法花玄義1／梵網経1／摩鄧女経1／明宿願果報経1／弥勒下生経1／維广（摩）詰（所説）経1／立世経1／未曽有経1／玉玉（瑠璃）（王）経1／六度（集）経1

内典は、外典に比して引用度数が低いように思われる。外典が九九種五三二回も引用されるのに対し、内典は七九種一四八回と下回るのである。内典にあっては、大般涅槃経・大唐西域記・大智度論・高僧伝・法華経・大日経疏などの引用が比較的多いようである。又、三教指帰・付法伝・請来目録など空海撰述書も利用されていることは当然のことのようにも思われるが注目に値しよう。

(c)辞書・音義

玉篇32（「玉」19、「玉篇」13）／廣韻2（「廣」1、「廣韻」1）／一切経音義玄応1／宋韻1

(A)・(B)の他、字義・音について注解する(C)辞書・音義の類も右の如く引用されている。

尚、これら(A)・(B)・(C)のそれぞれが直接引用か間接引用かといった問題に加えて、「或本」・「或抄」・「或説」などの引用も見られるが、いずれも未考證である。

かように未詳のものも多く、更に見落しの多からんことを恐れる。又、具体的に個々の文献の引用態度については言及し得なかったので、今後の課題とすべき問題点が山積しているが、以上が『略注』に明示された出典文献の概要である。

ところで、右の他、性霊集本文中の漢字の字義や反切・和訓について注解するものの中に、典拠名を示さずに引載している例が散見する。これらの事例は、(イ)字義・反切を示す例と、(ロ)和訓を中心に記載する例の二類に分けられる。

このうち、(イ)の例は十二例を数えるが、これらは上巻の第一巻一二丁までに集中して出現している。

結論的に言って、これらは、宋本玉篇の一本からの引用である可能性が高いと思われるのであって、今、沢存堂本『大廣益會玉篇』（中華書局一九八七）によって比較対照してみると、次の如く一致する所の多いことを知る。

①摘（割注右）多革切拓（割注左）果樹貫（上一オ8）［青襟摘槐林之春秋（151・8）］／摘（割注右）多革切拓果（割注左）樹貫也一曰」（割注右）指近（割注左）之也（上五十九右）

※最初に『略注』の例を掲げ（括孤内は所在を表す）、［　］は被注字を含む性霊集本文を大系本に拠って示し（括孤内は頁・行）、／印以下、沢存堂本の対応箇所を掲げる。以下同。

②拓（割注右）取也（割注左）拾也（上一オ8）［ナシ。①注文ノ「拓」字ヲ注セルカ。］／摭（割注右）之石切取（割注左）也拾也拓（割注右）同上又（割注左）他各切（上五十九左）

③猷（割注右）以周切（割注左）謀也道也（上一ウ11）［慕超然遠猷（151・9）］／猶（割注右）以周切猨属也猶豫不定也（割注左）尚也可也詐也言也又以救切猷（割注右）余周切圖也（割注左）亦與猶同（下二十八右）

④夐（割注右）休己切（割注左）遠也（上一ウ11）［夐巖谿溪之美（151・9）］／夐（割注右）詡政霍見二切深遠（割注左）也説文云営求也（上四十五左）

⑤籥（割注右）以灼切（割注左）楽器似笛（上三オ8）［ナシ。同行ニ「玉云籟（割注右）力大切（割注左）三孔籥」トアル注文ノ字ノ注カ］／籥（割注右）以灼切楽（割注左）器似笛（中三十七左）

⑥啄（割注右）竹角切（割注左）鳥一又丁木切（上四ウ3）［啄雞奔獸之點（153・16）］／啄（割注右）丁角切鳥食（割注左）也又丁木切（上五十一右）

⑦喙（割注右）詡穢切（割注左）又一也（上四ウ3）［ナシ。依拠シタ玉篇ニ於ケル⑥「啄」字ノ次ノ掲出字ナルカ、但シ、沢存堂本デハ不然。］／喙（割注右）詡穢切口喙左氏（割注左）傳曰深目而豭喙（上四十八右）

⑧泓澄（割注右）上於紙切水深也（割注左）下直庚切水清定也（上四ウ11）［池鏡泓澄含日暉（155・2）］／泓（割注右）於紙切（割注左）水深也（中七十一右）澂（割注右）直陵切説（割注左）文曰清也（中略）澄（割注右）同（割注左）上（中七十一左）

⑨衝揚（割注右）上尺容切當也（割注左）向也突也下與章切擧也（上五オ1）［気質衝揚（155・2）］／衝（割注右）鹵龍切交道也（割注左）向也突地動也衝（割注右）同（割注左）上（上九十五右）揚（割注右）與章切（割注左）擧也（上五十九右）

⑩煥（割注右）呼換切（割注左）明盛（上五オ3）［煥乎可観（155・3）］／煥（割注右）呼換切明（割注左）也亦作奐（下八右）

⑪邙（割注右）莫旁切河南洛（割注左）陽北土山上邑也（上一〇オ5）［北邙散白楊（161・8）］／邙（割注右）莫旁切河南洛陽（割注左）北土山上邑也（上二十右）

⑫籍（割注右）秦昔切（割注左）薄籍（上一二ウ4）［乾坤經籍箱（163・8）］／籍（割注右）慈昔切（割注左）薄籍也（中三十九右）

玉篇と一口に言っても、その研究史の教える如く、原系本、広益本、大広益会本（宋本・元本・明本）の如き種別のある上、さらにそれぞれに伝本が複数存し、加えて、篆隷万象名義などの問題も絡んで極めて複雑な様相を呈している。[20] 右の比較も、略〻一致をみるものの厳密には少なからず異なる点を見出すのであって、今後の玉篇諸本の精密な系統研究の進展を俟って補正を図らねばならないことを痛感するものである。

尚、これら①～⑫の宋本玉篇の一本からの引用と思われる諸例が、第一巻一二丁までに集中して出現することについては、この一二丁以降、「玉云」・「玉篇云」として引載する例の散見する事実より推して、恐らく、当初（即ち一二丁まで）は、何らかの理由で一々出典名を記さなかったものをこれ以降方針を変更し、他の引用文献と同様記すようになったものと想像される。

扨、次に、(ロ)の和訓を中心に記載する例については、はじめに述べたように、類聚名義抄からの引用であると判ぜら

れるものであって、項を改めて詳しく論ずることとしたい。

三、『略注』に引用された類聚名義抄

『略注』に出典を明示せず、性霊集本文の字について複数の片仮名和訓を引載している例は十例を数える。これらは、いずれも、改編本系の類聚名義抄から引用されていること疑を容れない所であると思うのであって、今、繁を厭わず、その記事をすべて掲げる。

『略注』の記事以下、［　］に性霊集本文（大系本）の対応箇所、改編本類聚名義抄の伝本を〔観〕（観智院本）、〔高〕（高山寺本）、〔蓮〕（蓮成院本）、〔西〕（西念寺本）の順で示すこととする。[21]

①颯々者風貞也」颯タチマチニ（割注右）アカル　チル　スゝシ　フ（平）ク（上）（割注左）シナフ　サ（上）メ（上）ク（平）　禾サフ　（上二二オ2）［颯々風満房（179・6）］／〔観〕颯颯（割注右）先合〈反〉　タチマチニ　アカル　チル　スゝシ　フ（平）ク（上）（割注左）シナフ　サ（上）メ（上）ク（平）　又力急又虚含又送谷〈反〉」朔　禾サフ（僧下五二4・5）※〈反〉は原文の「反」の略字（その終二画）を表す、以下同。〔高〕掲出字相当箇所欠（以下、単に欠と記す）。〔蓮〕颯颯（割注右）先合〈反〉　タチマチニ　アカル（割注中）チル　スゝシ　フ（平）ク（上）　シナフ　サ（上）メ（上）ク（平）（割注左）又力急又虚含又送谷〈反〉（下二、四三オ5）〔西〕欠。

②祁々者甘雨貞也　祁（割注右）マシフ　サ（上）カ（上）リ（上）オツ（上濁）（割注左）シ　オコス　ヤウ　ヤク（上二二オ3）［祁祁雨伴颲（179・6）］／〔観〕祁（割注右）マシフ　サ（上）カ（上）リ　オコス（割注左）ヤウヤク（法下八6）〔高〕欠。〔蓮〕欠。〔西〕欠。

③魑魅者小鬼也　魑ハ鬼也　魅者物精」也玉篇見木魅コ（上）タ（上）マ（平）　スタマ　ミ（上）ツ（上濁）ハ（上）」イエノカミ　禾―ミ（上二二オ5）［魑魅媚殺人（179・7）］／〔観〕魅魅（割注右）今正祓　スタマ　ミツハ　イヘノカミ（割注左）古〈音〉媚　禾云ミ（平）魅魅古今木魅コ（平）タ（上）マ（平）（僧下四八4）※〈音〉は原文の「音」の略字（その初二画）を表す、以下同。〔高〕欠。〔蓮〕魅魅（割注右）（右傍「魅字」）々正棟古〈音〉媚　スタマ（割注左）ミツハ　イヘノカミ　禾ゝミ魅魅（割注右）古々〈割注左）木魅コ（平）タ（上）マ（平）（下二、四一ウ5）〔西〕欠。

④荏苒者速疾也　張茂光励志詩曰」日与月与荏苒トシテ代謝ス云々」――(上濁圏)――(上濁圏)上而(平濁)枕(平)文エ　タチマチ　ヤワラカナリ　下〈音〉染」ヘヽラカニシテ　ナヲ　ナソ―　ツキハヘタリ　シヽヤカンシテ」呉〈音〉尋(去濁)染(平)(上二六オ)［住此修道　荏苒四祀（187・16）］／〔観〕荏苒(割注右)上而(平濁)枕(上)〈反〉　エ(上)　タチマチ　ヤハラカナリ　下(音)染(上濁)　ヘヽヤカニシテ(割注左)ナヲ　ナソ　―　ツキハヘタリ　シ(平)ゝ(平濁)ヤカンシテ　ヘ(平)ゝ(平)ヤカンシテ　呉(音)尋(去濁)染(平濁)（僧上三四3）〔高〕欠。〔蓮〕欠。〔西〕欠。

⑤伊祁者堯王之姓也　祁(割注右)マシフ　サカリ(割注中)オソシ(割注左)オコス　ヤウヤク（上五三オ9）［伊祁之子不肖聖孝（245・17）］／〔観〕以下②の挙例の通り。

⑥滂沱者水湛貞也」――(割注右)上普傍反タヽフ〈合〉　アマネク〈合〉　ヒロシ〈合〉　ナカル〈合〉(割注左)ヨル〈合〉　ワカルレ〈合〉　ハヒコル〈合〉　ヒハツク〈合〉ソヽク〈合〉下」エ(マヽ)馳――水多貞（下五オ2）［不労燕舞畎澮滂沱（295・7）］／〔観〕滂沱(割注右)上普傍〈反〉下〈音〉馳―　――水多貞　タヽフ(割注中)アマネシ　ヒロシ　ナカル　ソヽク　ヨル(割注左)ワカレル　シルツク　ハヒコル（法上二5）〔高〕欠。〔蓮〕滂(割注右)上普傍反　タヽフ　アマネク　ヒロシ　ナカル(割注中)ソヽク　ヨルィ　ワカル　アカル　シルツク(割注左)ハヒコル　禾ハウ下〈音〉馳――水多貞（中一、一ウ3）〔西〕欠。

⑦婉(割注右)遊建反　ウルハシ　ヤハラカナリ(割注左)シタカフ　ウコカス　カサナル　ウツクシフ」(割注右)メクル(割注左)マ(上)ケ(平濁)テ（下七オ7）［ナシ。『略注』ノ「梵曲者」以下ノ注文ニ「哀婉」アリ（下七オ5、之ニ注セルカ。］／〔観〕――婉(割注右)タヲヤカナリ　下於遠(上)反　ウコカス　カ(上)サ(上濁)ル(割注左)ウルハシ　ヤハラカナリ　シタカフ　ウ(平)ツ(上)クシフ　メクル　マ(上)ケ(平濁)テ（仏中一四1）〔高〕――婉(割注右)タオヤカ也　ヤハラカナリ　シ(上)タ(上)カフ(割注中)於遠反　ウコカス　カサル　ウツクシフ(割注左)ウルハシ　メクル　マ(上)ケ(平濁)テ(上)（巻上五五オ3）〔蓮〕――婉(割注右)タヲヤカナリ　ウルハシ　ヤハラカナリ(割注中)下於遠反シタカフ　ウコカス　カサル(割注左)ウツクシフ　メクル　マケテ(虫損アリ、声点ノ有無未詳)（上一、二八オ7）〔西〕欠。

⑧四銖肸響者四銖者四種ノ香也」饗ミ(上)ツ(上濁)キ(上)モノ　タテマツル　アフ　尚饗(コヒ(上濁)ネカハクハ)ウケタマヘ　（下一六ウ4）［四銖肸響五笠照灼（317・11）］／〔観〕饗(割注右)ミ(上)ツ(上)キ〈物〉　タテマツル　ウ(平)ク(上)　アフ　〈音〉響(上)(割注左)亦享　アヘス〈合〉　アルシ　大将――尚饗コ(平)ヒ

(上)ネカハクハ」ウケタマヘ(僧上一〇七8、一〇八1)〔高〕欠。〔蓮〕饗(割注右)タテマツル　ウ(平)ク(上)イ(割注中)アルシ　アフ(割注左)クラフ　〈音〉饗(上)」(割注右)亦享　アヘス〈合)　尚饗コヒネカハクハウケマヘ(マヽ)(割注左)――賜　アヘタマイ〈「フ」を見消)(下一、三三オ4・5)〔西〕欠。

⑨蛇佶(コク)〔入圏〕之八万寿者(中略)」(一字下げ)或本蛇佶ノ八万寿云々　今案佶字結(マヽ)ノ」誤(ル)欤　佶(コク)(割注右)口篤〈反〉サカユ　ヤスシ　マク　タノシ(割注左)アヤマチ(下三九ウ10)〔蛇佶之八萬寿(375・16)〕/〔観〕佶(割注右)口篤〈反〉急暴ゝ　サカユ　ヤスシ(割注左)マク　タノシ　アヤマチ(仏上二四7)〔高〕佶(割注右)口篤反　急暴ゝ(割注中)サカユ　ヤスシ　マク(割注左)タノシ　アヤマチ(巻上一四オ6)〔蓮〕欠。〔西〕佶(割注右)口篤〈反〉急暴(割注中)ゝ　サカユ　ヤスシ(割注左)マク　タノシ　アヤマチ(一三オ4)

⑩庠序者大学寮欤　学屋(ノノ)也　庠言(ノハ)養也庠(割注右)〈合〉〈音〉祥訓ハ養老宮(割注左)ヤウヤク　イフ　ヤシナフ　同誇(下五六オ3)〔国家廣開庠序(423・11)〕/〔観〕庠(割注右)〈音〉祥　養老宮(割注左)ヤウヤク　ノフ」ヤシナフ　同詳(法下一〇一7・一〇二1)〔高〕欠。〔蓮〕欠。〔西〕欠。

右によって、反切注・和訓(語形のみならず掲出順序や声点付か否か、又、声点付の場合の差声位置)など、総じて改編本系の類聚名義抄とよく一致していることが知られるのである。

しかしながら、それぞれに全同ではなく少異が指摘される。気付いた点を述べると、①では、観智院本・蓮成院本に存する反切注が『略注』にない、『略注』と観智院本に存する和音注が蓮成院本にないなど。②・⑤の「祁」について、『略注』に存する「オツシ(〇上濁〇)」(②)・「オソシ」(⑤)の和訓が観智院本にはない。③『略注』の「ミツハ(上上濁上)」の声点が観智院本と蓮成院本になく、「コタマ(上上平)」の第一音節「コ」は、二本では平声となっている。改編本二本と『略注』との和訓の相違は、『略注』が、まず「木魅コタマ(声点略)」を引き、本来の被注字である「魅」の和訓(「スタマ」以下)をその後に続けて記したことに因るか。④『略注』・改編本(観智院本)ともに熟字で掲出しているが、『略注』には両字とも上声濁の圏点が差されてある。『略注』の「文」は〈反〉の誤まりか。観智院本の「エ」や「シゝ

ヤカンシテ」の声点は『略注』にはない、又、観智院本「ヘゝヤカニシテ」は『略注』では「ヘゝラカニシテ」とあり、観智院本「ヘゝヤカンシテ」は『略注』にはない。⑥『略注』の和訓のすべてに合点が付いているが、改編本二本には見られない、又、『略注』の「ヒハツク（「ヒ」「ハ」字形不審）」は改編本二本「シルツク」とあり、改編本の「アカル」は『略注』に見えない。『略注』と蓮成院本が「アマネク」と連用形になっている所を観智院本では「アマネシ」と終止形にする。蓮成院本が「滂」一字で見出しにあがっていること（誤脱か）、「ヨル」にイ「本」注記が存すること（高山寺本系の和訓か）[22]、和音注「ハウ」のあることは、『略注』・観智院本とは異なった点である。⑦『略注』に存する反切注「遊建反」・和訓「カサナル」は、改編本三本では、それぞれ「於遠反」、「カサル」となっている（『略注』の「カサナル」は誤か）。又、改編本三本の「タヲ（オ）ヤカナリ（也）」は、『略注』にない。⑧改編本に存する和訓「ウク」・「アヘス」・「アルシ」は『略注』にない、『略注』「ミツキモノ（上上濁上〇〇）」とする「ツ」の濁点は誤りか。⑨『略注』「アヤマテ」の「テ」は「チ」の誤写か。⑩『略注』の和訓「イフ」は観智院本で「ノフ」、「同誇」は「同詳」と記す。

もともと用例が少ない上、改編本系の類聚名義抄の内、西念寺本や高山寺本は対応箇所の欠落している場合が多く、観智院本や蓮成院本もそれぞれに少異が認められ、『略注』の拠った名義抄が諸本のどれに近いかは俄かに断ぜられないが、強いて言うならば、右の①・⑥（但し「アマネク」については逆）などから、蓮成院本よりは観智院本に近い本文であったと思われる。

むすび

以上、聊か疎略な叙述に走った嫌いはあるが[23]、『略注』に改編本系類聚名義抄の引用されている事実が明らかになり、性霊集の注釈活動に類聚名義抄の利用されたことが判明した。利用の仕方（あるいは態度）としては、この『略注』の場合、性霊集本文ではなく注文の字について引くことがあり（前項⑦「婉」）、引用に際して他の文献とは異なり出典名を

明示しない点などから推して、その扱いとしては軽く備忘のために一時的に示しておいたものとみてよかろうか、尚考えたい。

従来、観智院本類聚名義抄に、「在宝龠並聖(マヽ)霊集」(仏中二四4)・「在性霊集」(法上七一4)の如く、性霊集の名の見えることは指摘されていたが、[24] 此の度は、その類聚名義抄(但し、現観智院本そのものではない)を用いて性霊集本文の理解を深め、注釈を成したことがわかったのである。

又、本書『略注』の成立には、高野山の十輪院真弁が関与していると認められ、先述の如く、これは大楽院信日と師弟関係にあったと説かれている。

大楽院信日は、金剛三昧院蔵『大日経疏聞書』や観智院蔵『広付法伝聞書(并略付法聞書)大楽院読師』といった類聚名義抄の逸文を今日に伝える書の奥書や題に見える人物であって、[25] 鎌倉時代の高野山に於ける類聚名義抄流伝の問題を考える上で興味深い。今後、類聚名義抄を軸とした辞書史の研究、特にその後世への影響について考えてゆく場合には、かようの点にも留点すべきであると思う次第である。

さらに、『略注』の方を軸として性霊集注釈史の問題を設定した場合には、他の古注釈で名義抄の引用がなされているかどうかも考えてゆかねばならないであろう。この場合、例えば、六地蔵寺本性霊集の紙背裏書の存在が注意される。月本雅幸氏は、この裏書の内容について、(1)和訓を示すもの、(2)漢字で語義を示すもの、(3)字書を引用するもの、(4)「荘子云」などとして纏まった文を引用するもの、の四種を認められ、(3)・(4)について「恐らくは一々の原典から直接引用したのではなく、先行の注釈があったかと思われるが、それが何であるか未だ見出していない」と結んでいられる。[26] その注釈の内容に相違があり、出典文献に東宮切韻や延喜式・ヒフ(文鏡秘府)論など『略注』に見えないものの存することなどから、『略注』そのものであるとは認められないが、(1)〜(4)の特徴(加えて、(2)に「—義也」・「—貞也」形式の指摘されること)よりして、注釈形式の基本は『略注』タイプであったのではないかと推測される。

このうち、(1)和訓を示すものの中で、

○―(割注右)ソゝク(割注中)アラフ(割注左)スゝク（七272、「滌」字に対して）／〔観〕滌(割注右)〈音〉敵俗又〈音〉條誤ゝ　スゝク(上上○)　アラフ(上上○)　ソゝク(上上○)(割注左)ハラフ　ウコカス　（法上三2）

○―(割注右)如枕友(割注中)年熟(割注左)ニキハフ　ユタカナリ（三123、「稔」字に対して）／〔観〕稔(割注右)〈音〉在(右「ニム」左「シム」)　ミノル　トシ(平平)　ニキハフ　ナム(割注左)年ゝ　熟ゝ　ユタカナリ(平上○○)（法下一五8）

○―(割注右)ミル(割注中)ナツラフ(割注左)マ子キル（二240、「待」字に対して）／〔観〕待(割注右)〈音〉怠　マツ(平上)　ミル　給ゝ　逗ゝ　ナスラフ　ソナフ(割注左)トゝム　マ子キル　アカシ　禾〈音〉レタイ（仏上四二1）

などは、その和訓が観智院本類聚名義抄に見え、あるいは抄書した可能性も存するかと思われるが、「享」字（十139）に対して裏書された「スゝム」「アツ」「ウム」や「粋」字（二93）の「クタ〳〵シ」の如き和訓は見出せず、尚疑が残る。

この六地蔵寺本性霊集裏書の問題も含め、性霊集の古注釈については、多くの検討課題が存するように思われる。

（平成三・一・二十一）

注

（1）岡田希雄『類聚名義抄の研究』（昭19・一条書房）
吉田金彦「類聚名義抄小論」（『国語国文』24―3、昭30・3）
渡辺実「西念寺本蓮成院本類聚名義抄について――関西大学現蔵本の紹介を機に原名義抄の編成の推定に及ぶ―」（『島田教授古稀記念国文学論集』昭35・3）
築島裕「改編本系類聚名義抄の成立時期について」（『福田良輔教授退官記念論文集』昭44・10）他。

（2）注（1）岡田文献
川瀬一馬『古辞書の研究』（昭30・雄松堂）
渡辺実『三寶類字集』解題（『天理図書館善本叢書』昭46・11）

犬飼守薫「改編本系類聚名義抄諸本に見られる合点の考察――成立論への手がかり―」（『愛知県立惟信高等学校研究紀要』五、昭49・3）

（3）草川昇「改編本系類聚名義抄相互の関係――標出字・和訓の面からの一考察――」（『訓点語と訓点資料』68、昭57・5）他。

佐藤喜代治「新撰字鏡の本文について」（『東北大学文学部研究年報』1、昭26・3）

築島裕「図書寮本類聚名義抄と和名類聚抄」（『国語と国文学』40―7、昭38・7）

築島裕・小林芳規「高山寺所蔵一字頂輪王儀軌音義について」（『国語学』71・昭42・12）

宮沢俊雅「図書寮本類聚名義抄に見える篆隷万象名義について」（『訓点語と訓点資料』52、昭48・7）

同「図書寮本類聚名義抄と妙法蓮華経釈文」（『松村明教授還暦記念国語学と国語史』昭52・9）

同「図書寮本類聚名義抄と法華音訓」（『北大国語学講座二十周年記念論輯　辞書・音義』昭63・3）

山本秀人「図書寮本類聚名義抄における真興大般若経音訓の引用法について」（『訓点語と訓点資料』85、平2・9）他。

（4）吉田金彦「図書寮本類聚名義抄出典攷」（『訓点語と訓点資料』2・3・5、昭29・8、29・10、30・10）

築島裕「類聚名義抄の倭訓の源流について」（『国語と国文学』27―7、昭25・7）

山本秀人「改編本類聚名義抄における文選訓の増補について」（『国文学攷』105、昭60・3）他。

（5）前田富祺「世尊寺本字鏡の成立――『新撰字鏡』と『類聚名義抄』との比較において――」（『本邦辞書史論叢』昭42・2）他。

中田祝夫「類聚名義抄使用者のために」（『観智院本類聚名義抄索引』附載、昭30・風間）

（6）同「「文華風月至要抄」所載の類聚名義抄佚文」（『訓点語と訓点資料』7、昭31・8）

平岡定海「類聚名義抄の逸文」（『国文学言語と文芸』2、昭34・1）

築島裕「叡山文庫天海蔵蘇悉地羯羅経略疏建久点に見える類聚名義抄の逸文」（『国語学』40、昭35・3）

同「改編本系類聚名義抄逸文小見」（『鎌倉時代語研究』11、昭63・8）他。

（7）例えば、一の(3)出典を手懸りとして(2)系統研究を志向する、

山本秀人「改編本類聚名義抄における新撰字鏡を出典とする和訓の増補について――熟字訓を対象として――」（『国語学』144、昭61・3）

などを挙げることが出来よう。

(8) 築島裕「類聚名義抄の研究史をめぐって」(『天理図書館善本叢書月報』30、昭51・9)

(9) 『三教指帰　性霊集』解説(『岩波日本古典文学大系』71、昭40)、川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』上第二章第二節遍照発揮性霊集の成立と諸本(昭50・明治書院)。

(10) 阿部隆一『慶応義塾図書館蔵和漢書善本解題』19(昭30)「新に見出されたる鎌倉鈔本真弁撰『性霊集略注』」(『慶応義塾図書館月報』9、昭30・8)

(11) 拙稿「空海作願文の表現世界」(『人文論叢』〈三重大学人文学部文化学科〉8、平3・3)

(12) 第一回平成元年八月十八・十九日、第二回平成二年五月二十八・二十九日調査。

(13) 月本雅幸氏の御教示による。

(14) 他、『紀伊続風土記』三十五、『本朝高僧伝』十五などに見える。

(15) 注(10)文献に「弘長元年(一二六一)寂す」とあるは誤まりか(『野峯名徳伝』に拠った為か)。

(16) 加えて、本文書の署名には、「真辨」の上位に「聖範」の名も見える(大系本の説くように覚蓮房本が承安二年(一一七二)以前に成っていたとすれば、これも別人か)。

(17) 注のない詩文はいずれも言語量のさほど多くない篇であり、これも注がないことの一因であろうと思われる。

(18) 小林芳規「中山法華経寺本三教指帰注の文章と用語」(『国文学攷』72・73合、昭51・12)
菅原範夫「中山法華経寺本三教指帰注の注釈の諸形式」(築島裕・小林芳規『中山法華経寺蔵本三教指帰注総索引及び研究』昭55・武蔵野書院)

(19) 注(10)に「皇侃義疏」と指摘がある。

(20) 岡井慎吾『玉篇の研究』(昭8、東洋文庫)
馬淵和夫『玉篇佚文補正』(『東京文理科大学国語国文学会紀要』3、昭27・12)
貞苅伊徳「玉篇と篆隷万象名義について」(『国語学』31、昭32・12)
宮澤俊雅「図書寮本類聚名義抄に見える篆隷万象名義について」(『訓点語と訓点資料』52、昭48・7)他。

(21) 観智院本・高山寺本は「天理図書館善本叢書」、蓮成院本は『鎮国守国神社蔵本三寶類聚名義抄』(昭61・勉誠社)、西念寺本は天理図書館蔵『類

聚名義抄 慧察本 一』（平成二年十二月十八日原本調査）に拠った。

(22) 山本秀人「蓮成院本類聚名義抄の「イ」本注記について」（『鎌倉時代語研究』11、昭63・8）

(23) 「崎嶇者ウチハヤシ（上上濁上上上）」（上一九オ8）や「惘然者阿和手太里」（上四七ウ6）のように、声点付片仮名和訓を一つ示すものや万葉仮名で示された和訓の注も存するが、その出自については未考である。

(24) 注(1)岡田文献一六〇頁。

(25) 注(6)築島(昭63)文献。

(26) 月本雅幸『遍照発揮性霊集』（『六地蔵寺善本叢刊』2、昭60・汲古書院）解題。

〔附記〕 本稿を成すに当り、月本雅幸氏（性霊集に関して）、田中貴子氏（真弁に関して）、宮沢俊雅氏・小助川貞次氏（玉篇に関して）、山本秀人氏（名義抄に関して）に有益な御教示を賜わった。又、原本閲覧について、慶応義塾図書館・天理図書館の皆様より格別の御厚情を忝うした。記して、深謝申し上げる次第である。